

情熱の
エンジン

01

挑戦する、決断する、実行する、貫徹する。
胸を張り、前を向き、地を踏みしめて往く人の
背中を押すのは、情熱のエンジン。
胸に秘めたその在りようを聞く。

武田美保

Miho Takeda

シンクロナイマー



想いの力で作り込んだ 表彰台で輝く“私”

水面を優雅に泳ぐ白鳥は、水中で必死に水を掻いている。
人間だって同じだ。なりたい自分になるために、
もがく努力を続けることができた者だけが、
人生の表彰台に立てる。彼女は、そうして自分になった。

お稽古のスイミングで見いだされた “角材みたいにまっすぐな身体”

親が子に、よかれと思って始めさせたお稽古ごとがその人の生き方をも決めることは、じつは珍しいことではない。トップアスリートの多くは、そんなごく当たり前のきっかけで競技と出逢っている。シンクロナイズドスイミングのメダリスト、武田美保さんもまた、そんなひとりだった。

アトランタ(96年)、シドニー(00年)、アテネ(04年)の五輪3大会では、チーム、デュエットの各種目で女子五輪選手史上最多タイとなる、通算5個のメダルを獲得。世界選手権やアジア大会、ワールドカップでも、金をふくむ多くのメダルを日本にもたらした。04年の競技引退後も、アスリートによる肉体表現芸術「マッスルミュージカル」出演や、テレビ番組のコメントーター、講演など、活躍の舞台を拓げている。そんな彼女が水泳と出逢ったのは小学校入学前、5歳のときだった。

「家からほんの1分のところにあるスイミングスクールに通い始めたんです。近所の子供はみんな通っていて、むしろ遅いぐらいだったんですよ」と言う。もちろん、それがその後の人生を決定づける一大事などは、想像してはいない。当たり前のお稽古ごとのひとつだ。

もっとも、彼女にとってはご近所の、身近なそのスイミングスクールは、じつは100年以上の歴史を誇る名門だった。競泳に加えて水球やシンクロナイズドスイミングのコースも持ち、多くのトップスイマーを輩出している。しかし、当時の彼女はそこで、けっして優等生ではなかった。



オリンピック中継でもおなじみの、笑顔の練習もあった。しかし競技のために誇張された笑顔は、引退後、撮影の機会があるたびカメラマンから「もっと自然に」と言われてしまった、と笑う。今の笑顔はとても自然でチャーミングだ。



91年のジュニア世界選手権でのチーム演技金メダルを皮切りに、毎年のように多くの世界大会でメダルを獲得。3大会に出場したすべてのオリンピックでもメダルに輝いた。それは絶対にこうなる、という具体的に強いイメージに向かって努力した結果だ。

Text: Akira Yokota
Photograph: Yukio Yoshinari
撮影協力: 347 cafe

なりたい自分に向かう気持ちを 支えてくれた母の強さ

「絶対アレ以外にはない!」と思いましたね。表彰台の一番上で手を振る自分を、はっきりとイメージしたんです」と、武田さんは、テレビで選手の演技と表彰台での雄姿を見たときの気持ちを振り返る。そして彼女は、そのイメージを実現させるための具体的な手順まで思い描いた。

「中学でジュニア選手権優勝、高校で全日本代表、という具体的な目標ができたんです。なんとなく『なりたいな〜』ではなくて、『絶対になるんだ!』って。それを強く思えたからこそ、うまくいかずに苦しいときにも頑張れたんだと思うんです。じつは私は『この選考会は外せない』といったプレッシャーがあるほうが力を出せるタイプ。なりたい自分を強く思い、『ここで選考を通らなきゃ、人生終わりやで』と思うと、サボりたい自分に打ち勝って、厳しい練習にも耐えられたんです」

そんな武田さんを支えた大切な人がいる。水泳に出逢わせた張本人である母上、玉子さんだ。彼女は武田さんの心の動きをも細やかに感じ取り、巧みにリードしたのだ。

「コーチにこっぴどく怒られて、『そんなじゃオリンピックなんて無理ね』とまで言われて落ち込んでいると、『ホントに育てる気がなければ怒ってくれないよ。怒ってもらえてよかったねえ』とか、私が生意気になってチームメイトから浮いてしまったときには『みんなが追いつけないぐらい上に行けば、誰からも文句は言われないよ』と、いつも親というより、大人として、的確なアドバイスをしてくれたんです」

だからこそ武田さんは、厳しい練習を耐え抜き、絶対に立つんだ、と決めた表彰台を目指して頑張ることができたのだ。テレビの水中映像からもわかる通り、シンクロは水上の美しい演技とは裏腹に、水中ではまさにスポーツとしか形容できない激しい運動がおこなわれている。しかも、採点競技であるシンクロでは、たんに身体能力が優れているだけでは勝てない。美しさという正解のない目標に向かって、気の遠くなるような努力が繰り返されているのである。

「私はものすごく身体が固くて、初めての五輪のときにはコーチから『ありえないよ』と言われたほどなんです。だったら骨盤をずらして、キレイに見える足の開き方をしよう、とか、自分らしい表現も考え抜きました」

もちろん、やめたい、と思ったことも一度や二度ではない。けれど、「ここでやめたら今までに注いだ情熱や、応援してくれた人もなくなってしまふ。そしてなにより自分に負けたことになるのがイヤでした。想いを遂げ



「もしも普通に競泳のコースを進んでいたら、私はとっくに水泳をやめていましたね。だって、普通の子が1年ぐらいで合格する進級テストを受けられるまで、1年半もかかったんです」

ところが、ある日コーチから呼び出され、「シンクロをやってみない?」と言われた。自分だけに声がかかった特別感に喜びながら、やってみるとこれがまたうまくいく。褒めてもらえる楽しさに、まだ7歳の彼女はたちまち夢中になった。

「シンクロの基本である、ただまっすぐ水に浮く練習ひとつでも、人によっては足だけが沈んでしまったり、意外と難しいんです。競泳は、ある程度形を練習すれば上達できますが、じつはシンクロには、持って生まれた体形とか身体のバランスといった、向き不向きがあります。私はコーチから『角材のようなまっすぐな身体』といわれましたが、それも倒立姿勢がキレイにできる、シンクロではいい意味の言葉なんですよ」

かくして、文字通り水を得た魚のように上達した武田さんに、次の転機が訪れる。小学校6年生、12歳のときに開催されたソウル五輪で、日本代表選手が銅メダルを獲得したのだ。



ずにやめた後のイメージも、いいものはなかった。だからやり切った、と言えるところまで頑張ってみよう、と続けたんです」

身体の固さを補うために、水上で開いた足を閉じる瞬間、少しでも遠くを足が通る軌跡を考える。持って生まれたまっすぐな足を活かすために、ヒザを伸ばす演技を工夫する。水上の観客からは美しい演技にしか見えない動きのひとつひとつに、武田さんは想いを込め、ミリ単位で磨き上げていった。そうしてついに、表彰台に登る日を現実にしたのだ。

自分を知ってもらえる喜びを 与えてくれたツールがシンクロ

現役を退いた今、武田さんはかけがえのないその経験を、多くの人に語ることを楽しんでいる。

「講演は自分の20数年間の付加価値が活かせる場所。選手時代と同じように、今でも私は人前が出る本番になると精神的に安定できるんです。自分の存在意義を感じられるというか。それで話を聞いた方に『私も頑張ってみようかな』と思ってもらえれば、社会貢献にもなる。嬉しい仕事だと思っています」

具体的な夢のイメージを強く持つことの大切さ。支えてくれる家族のありがたさ。人との出逢いの意味。多くの人の前で語るテーマのひとつひとつに、頂点に立つために、彼女が並外れた努力をしてきたという事実が重みをもって生きている。

「私にはずっと、自分を知ってほしい、という気持ちがあったのかもしれませんが。自分を表現して人にわかってもらうことがストレス解消でもあった。私にはシンクロがそれにぴったりのツールだったんです。でも、もしも私が

別のものを目指したとしても、同じように、具体的なイメージを強く持って、自分らしさを表現するにはどうしたらいいか、考え抜いたと思います」

今の自分はなるべくしてなった自分。と、武田さんは胸を張って言った。なぜそう言い切れるのかと問うとひとこと、
「だって、やったもん」

思わず自分の胸に手を当てたくなった。これだけきっぱりと言い切れるだけの努力を、自分はしてきただろうか、と。優勝劣敗の世界を生きるアスリートにとって、結果とは、言い訳のいっさいきかない、自分自身の生き方の表現なのだ。

人は誰でも、自分を誰かに知ってもらいたい、認めてもらいたいと思う。しかし、ただそれをぼんやりと望むだけでは、永遠にその日は来ない。なりたいた自分を強く想い、具体的に形にする努力を、多くの人の力を借りながら積み重ねて、初めて彼女のようになるのだ、とつくづく思う。頑張ろう!

P R O F I L E

たけだ みほ 1976年京都府生まれ 5歳のとき名門スクール「京都踏水会」で水泳を始め、7歳でシンクロコースへ。13歳でシンクロの名門、井村シンクロクラブに移籍し、ジュニアの日本代表入り。17歳でナショナルA代表。97年より立花美哉選手とデュエットを組み、日本選手権7連覇など黄金時代を築く。銀メダルに輝いた04年アテネオリンピック後に引退後は、マッスルミュージカル出演やTVのコメントター、講演活動など、幅広く活躍している。

